

『#運命じゃない人』（2004年：内田けんじ監督）をamazon prime videoで視聴した。監督はサンフランシスコ州立大学芸術学部映画科で映画を学んだ。本作は2005年カンヌ国際映画祭の批評家週間正式出品作品。

映画が始まりしばらくすると、出演者の視点で前場面の数十分前から別の角度からその場面が映し出される。そのパターンが何度も、最後まで繰り返される。視聴者は、前の場面では知りえなかったことが、次の場面で知らされて、「そうだったんだ」と思いながら映画を観続けることになる。観ているうちに、そろそろ数十分時間が巻き戻されるだろうな、という期待を胸に場面の切り替えを待つことになる。これをどんでん返しと言え、この映画はどんでん返し映画ということになろう（私はこのキャッチコピーで観ることにしたのだった）。

第一場面。勤務中のサラリーマンM。パソコンで別れた彼女Aの写真を見ては、ため息をついている。

第二場面。Mが帰宅した途端、携帯が鳴る。親友で私立探偵Kからだ。飯を食おうとKが言うが、疲れているMは外出するのを渋る。しかしKから「大事な話がある。Aのことだ」と言われた途端、Mは勢いよく家を飛び出していく。

第三場面。婚約破棄となり、二人で住む家を出てきたMa。婚約指輪を質屋に持って行ったが3500円にしかならず、一人入ったレストランはカップル、家族、友達同士でにぎわっている。寂しさがこみ上げて今に泣きそうだ。同じレストランの中、Mが待っているとKが遅れてやってきた。「Aのことって？」と切り出すM。するとKは「街で偶然会った。近々結婚するらしい」と告げる。Aはある日、結婚前提で購入したマンションから突然姿を消してしまったままだった。Mは、そんなひどい仕打ちをされたのに、Aが気がかりで仕方がない様子だ。いつまでも女々しいMにKは、Aのことは忘れて新しい出会いを探すようにと言う（出会いの最後はせめて電話番号を訊くことを強調する）。急に後ろのテーブルで一人座っている女（Ma）に声をかける。3人は一緒に食事をする事になり、自己紹介が終わり、Kがトイレに立つが、なかなか戻ってこない、Mが心配して探しに行くとKの姿はどこにもなく、携帯に電話をすると「急に仕事が入った」と切られてしまう。初対面のMaとの会話に緊張しながらもなんとか食事を終え、店を出て、Maを送ろうとするが、Maは、一緒に暮らしていた恋人との婚約が破棄になり家を出たため、帰るところがないという。MはそんなMaを放っておく

ことができず、自分の家に泊まってはどうかと提案する。人の良さそうな M に安心した Ma はその申し出を受け入れ、二人は M の家に向かった。

第四場面。マンションに到着し、M は Ma を寝室へ案内する。部屋の隅にあるダンボールを Ma が不思議そうに眺めていると、M がそれは前の彼女 A のものだと説明する。そして、A とのこれまでの経緯を Ma に話すと、M に同情し、Ma は思わず彼を抱きしめてしまう。ぎこちない空気が流れるところへ、玄関のチャイムが鳴った。やってきたのはなんと行方知れずの A であった。戸惑う M に、A は悪びれもせず、荷物を取りに來ただけと言い、ズカズカと上がりこむ。そんな自分勝手な A の態度に、Ma はたまらず一言批判して M の家を出て行ってしまう。M はすぐに後を追いかけて家に戻るように説得するが、それでも Ma はタクシーに乗ってしまう。しかし M は走り出したタクシーを全速力で追いかけて、勇気を振り絞り、Ma に電話番号を教えてほしいとお願いする。当惑する Ma だったが、真剣な M の表情に根負けし、電話番号を書いた紙を差し出す。うれしくなって M は横断歩道で踊り出す。

こんな感じで始まった映画は、数十分巻き戻されて別の人物の視点で場面が映し出されると、前の場面に至った本当の理由が見えて来る。そして、次の場面でもどんでん返しが繰り返される。実は M を取り巻く人々、Ma、K、A、そして、A の現在の恋人であるヤクザの親分の視点から見た一晩はまったく違う夜だったのだ。それに 2000 万円？のカネが絡んで、事態は誰も予想がつかない方向へと転がっていく。

予想もつかない 90 分。学習の合間の気分転換にお勧めである。この監督の別の映画も観たくなる。